

先日、セレモニーホールで葬儀を行った。逝去された方はキリスト者ではなかったが、キリスト者であるご遺族の希望によってキリスト教式で行うこととなった。人生の最期を主イエス・キリストへの讃美と祈りによって締めくぐられたことは、遺族にとって大きな意味があり、祝福であると信じている。

その方は50代で、今日では早逝と言えることで、家族にとってはいかに寂しく、心痛むことであるかは想像できるものである。きっと当人は思い残したことが多くあったに違いない。2年半ほど闘病生活を家族と共に続けた。緩和ケアも勧められたようだが、本人は治癒を望んでおり、なかなか受け入れることができなかつたということである。

小生もこれまでガンと闘ってきた方々の葬儀をしてきたが、現代ではおおよそ二人に一人は生涯で罹患するらしい。そのような中で、人生の最期まで健康でいて苦しまずにコロリと死にたいという方も少なくないであろうが、果たしてそれが理想的な最後の迎え方であろうかと考えさせられた。確かに余命が数年あるいは数か月と宣告を受ければ、本人も家族もショックは大きいし辛いものである。しかし余命宣告を受けたということは旅立つまでの準備期間を真剣に考えるということとなる。親しい者たちに伝えたかったこと、自分自身がすべきことを可能な限り行える時間となる。それが突然逝ってしまえば別れの言葉も準備ができないこととなる。また家族の方も援助や介護をするなら、最後にこれだけのことはしてあげたという気持ちにもなるし、された方も感謝の言葉や気持ちがあるであろう。そのように考えると、最後にガンと闘って人生を終えるというのは、もちろん苦痛も多いであろうが、ある意味、人間らしい最後の迎え方ができる機会を与えられるともいえるのではないであろうか、と思った。

（鈴木淳一牧師）